

# 西田幾多郎と田中美知太郎

——日本哲学とギリシア哲学の協働のために——<sup>(1)</sup>

納 富 信 留

## 一、始めに——戦前・戦後の溝

近代日本において西洋哲学が紹介され、研究し咀嚼されて久しい。古代ギリシア哲学も、幕末・明治以来一五〇年を経てすでに日本文化の一部となつている。だが、ギリシア哲学が日本の哲学においてどんな役割を果たしたのか、とりわけその専門研究が哲学者の思索にどう関わつてきたかについて、吟味と反省が必要な時期である。私はこれまで、明治期から戦中・戦後にかけてのプラトン受容を主に検討してきたが<sup>(2)</sup>、本稿では日本哲学とギリシア哲学との交わりを、西田幾多郎と田中美知太郎という中心人物から論じたい。

歴史を辿るにつれ、私は一つの問題に突き当たつた。戦前と戦後の間に刻まれた哲学伝統の溝である。第二次世界大戦の敗戦は日本の社会体制を一変させたが、哲学の営みにも大きな影を落とした。ギリシア哲学については言えば、プラトンをはじめとするギリシア哲学は明治から大正・昭和初期にかけて、知識人から一般人にまで広く関心を集めたが、戦後にその状況は一切無視され、あたかも無から研究が開始されたかのように扱われた。上杉慎吉や鹿子木員信らがプラトン哲学を基盤に国家主義・全体主義を唱えた歴史は敗戦と共にタブー視され、戦前の経緯が語られるこ

とはなかつた。ギリシア哲学や西洋古典の作品は戦後、叢書や翻訳が続々と出版され、日本西洋古典学会が一九五〇年に設立されるなど（創立メンバーには田中美知太郎がいる）新たな活況が生じた。だがそれは、戦前すでに多数の翻訳がなされ、哲学において重要な意義を担っていたギリシア哲学受容の歴史をかき消すことになった。これが戦前・戦後の間の溝である。

戦争への責任という問題は、京都大学では、西田幾多郎の影響を受けた所謂「京都学派」の教員たちが文学部を去るといふ空白を生んだ。一九四七年に山内得立の招聘で田中美知太郎らが新たに京都大学で教鞭をとるようになって、西洋哲学史研究の新たな伝統が築かれたが、それが戦前と戦後の溝を現出させることになった。西田哲学に代表される日本独自の哲学、“*Selbstdenken*”の標語で知られる学風と、文献学・哲学史の学問に徹した京都ギリシア哲学研究との間の対立、あるいは、相互の無視とでもいった状況である。これは、戦後七十年を経た現在にも、なんらか影を落としているように思われる。

他方東京大学では、戦前からギリシア哲学を担当してきた出隆が戦中の教育責任を痛感しながら戦後共産党に入党し、やがて一九五一年に東京都知事選挙に無所属で出馬して東大を退職するという事件が起こる。戦前と戦後の溝に由来する出の退職により、北海道大学から斎藤忍随がギリシア哲学の併任担当として招聘されるが、後々までしこりが残ったという。このように、戦前すでに始まっていたギリシア哲学研究は、戦後新たな形で再出発することになったが、それまでの経緯はタブー視され、忘却されていった。

他方で、戦前のギリシア哲学研究は日本の哲学者の間で例外的な見識を示していたという評価もある。「京都学派」に批判的な目を向けながら近代日本哲学を検討した『日本哲学小史』で、熊野純彦は二人のギリシア哲学研究者を取り上げて、まず出隆についてこう述べる。

時代により直接的にコミットした京都学派の哲学者たちとのあいだに、念うところにおいてさほどの径庭があるわけではない。距離は、おそらく、それぞれが背景とするところから生じた。出の背後には、古代ギリシアの経験と哲学とに学ぼうとする姿勢がある。(3)

田中美知太郎についての判断も、同様に肯定的である。

現在の目からみて驚くべきことは、とはいえ、戦局のゆくえにかかわるその冷徹な視線ばかりではない。それ以上に驚嘆すべきことは、京都学派全盛のその時代に、田中が、ごく平明なことばを積みあげながら、高度な哲学的思考を散文としていたことである。時局への認識と、哲学的な思考とは、当時の田中であつてひとつのものだつた。(4)

戦前と戦後をつなぎかつ分断するキーパーソンは田中美知太郎であろう。ギリシア哲学をめぐる歴史の屈折を反省的に克服し、新たな日本哲学とギリシア哲学研究との協働関係を打ち立てるためには、彼と日本哲学、とりわけその中心にいた西田幾多郎との師弟関係を再検討することが必須である。

両者の関係は、京都大学文学部という場を巡つて相敵対するものと見なされている。田中は戦後に西田哲学の伝統を拒否することで、新たな京都大学の哲学研究を立ち上げた。その流れでは、西田ら「京都学派」の哲学者たちがプラトン、アリストテレス、プロティノスらギリシア哲学に大きな興味を持ちそこから独自の思索を展開したやり方が、

素人の議論として批判される。自ら本格的なギリシア哲学専門研究を發展させた田中が、この否定評価によつて「京都学派」のギリシア哲学への関わりを退けたことになる。それは日本哲学とギリシア哲学との戦前の蜜月から戦後の離別へとという移行であり、以後今日に到るまで両者が互いを意識することはほとんどない。田中の批判が日本哲学の展開からどれほどの可能性を奪つてしまつたかは専門家の教示を請いたいだが、ギリシア哲学研究の側でも、自身で徹底的に考え時代に向けて発信するというそれまでの日本哲学の積極的なスタイルを捨てることで、アカデミックではあるが学術研究に閉じこもる態度が定着してしまつた。日本の戦後が経験したこの断絶は、その後の哲学営為に大きな負の影響を与えた、あるいは、少なくとも可能性と活力の多くを削ぐ結果を残したと思われる。

西田幾多郎の影響を受けた「京都学派」の哲学者では、西谷啓治や田辺元らは戦後も新たな思索を展開しており、一般に影響を持ち続けた。西田の著作が没後にも圧倒的な人気と評価を保つてきたのは周知の通りである。だが、二十世紀後半のある時期から、「京都学派の哲学」が歴史研究の対象となり、現在に至るまで大きな研究領域を形作つている。平たく言うと、西田や田辺や三木や西谷らと同じ土俵で批判的に自ら哲学思索を展開するのではなく、彼らの思想を対象として分析し解説する哲学研究が成立したのである。それらの必要性や価値は疑いがないとして、京都学派の哲学を展開すること、「京都学派」について哲学研究することの違ひは、改めて考えておくべき事柄である。

だが、これは「京都学派の哲学」だけの問題ではない。戦前の哲学者たちはプラトンらギリシア哲学者を単なる歴史研究の対象ではなく、日本や世界や人間のアクチュアルな問題を考える基盤にしようとしたが、戦後のギリシア哲学研究の多くは、そういった現実関与から距離をおき、中立的かつ客観的に歴史学・文献学研究に徹して彼らを扱おうとしてきた。その指導者が田中美知太郎であつた。やや矛盾するようだが、田中自身はギリシア哲学研究者として常に時代と社会に対して発言を行つており、「保守派」の論客として世論を導いていた。戦後の高度なギリシア哲学

研究がもたらした成果は否定すべくもないが、哲学として何かが根本的に欠けるのではとの反省が起こっている(5)。哲学の「獨創性」を排除する田中の文献学的・哲学史的志向は、「京都学派」や戦後の哲学諸動向との距離を生んできた。他方で、東京大学教養学部、九州大学文学部を中心にしたギリシア哲学と分析哲学との協働体制、具体的には井上忠・松永雄二らと黒田亘・大森莊蔵らとの関係はそういつた傾向に対する一つの反発ではあつたが、その意義を考へる上でも、京都大学での哲学に何が起こつたかを再考すべき時期であろう。本論考では西田幾多郎と田中美知太郎をめぐる状況をまとめるが、そこで展開された哲学の実質は、今後さらに追求されるべき問題となる(6)。

## 二、田中と西田の交差——自伝『時代と私』を中心に

西田幾多郎(一八七〇—一九四五年)と田中美知太郎(一九〇二—一九八五年)には、三十二歳ほどの年齢差がある。一九一〇年から一九二八年までの西田の京都大学在職期の後半、一九二三年から一九二六年まで田中は京都帝国大学文学部哲学科選科で学んでいる。田中は卒業後に東京に戻り、西田の定年に当たる一九二八年に法政大学文学部講師となつて、東京文理科大学でも講師として教育・研究活動に当たり、被災、終戦を迎える。一九四五年五月二十五日、東京大空襲で重傷を負つた田中が意識不明で生死の境をさまよつていた「空白の二週間」。その最中の六月七日、西田は鎌倉の自宅で病気のため七十五歳の人生を閉じる。病床でふと意識を取り戻した田中は、西田の訃報を聞く。「死と再生」を経験した田中が戦後を迎えるのは、そのすぐ後である。二人の人生の交差には、やや運命的なものを感じられる。

石川県出身で金沢から東京に出た西田と、新潟県出身で東京から京都に出た田中では人生の経路は異なっているが、

経歴では共通点も見られる。西田は東京帝国大学文学部哲学科、田中は京都帝国大学文学部哲学科で、共に「選科生」という身分で学生生活を送っていた(7)。西田は晩年の小文「明治二十四五年頃の東京文科大学選科」(一九四二年十月)で「当時の選科生といふものは、誠にみじめなものであった」とその不遇の時期を回顧している(8)。他方で、田中は同様の状況をまったく意に介さず、本科生と一緒に勉強していたようである(9)。年代の差、および東京大学と京都大学での扱いの差もあるが、劣等的境遇を経験した点では共感があつたかもしれない。

西田と田中の個人的な関係を見るために、参照できる資料は限られる。西田が田中にふれた日記記述は一箇所のみで(10)、書簡も残っていないため、この若手をどう意識していたのかは不明である。他方で、田中も通常は西田やその哲学について正面から論じることとはなかつたが、一九七一年に出版された自伝『時代と私』が重要な資料となるほか、その前年の六月二十九日には、中央公論社「日本の名著」シリーズ「西田幾多郎」の巻のため、責任編集者である上山春平(京都大学で十八年ほど後輩)と西田をめぐる対談がなされた(以下「対談」)。田中の西田評は批判的態度としてしばしば研究者に引用されるが、これらはややインフォーマルな発言であり、また、西田が死去してから二十五年を経た戦後に回想として語つたり綴られたりしたもので、当然様々な記憶の意味づけが加えられているはずで、そのままで歴史的証拠とは言えない(11)。だが、本稿ではそこから読み取れる限りを検討していく。

一般に、田中は西田哲学にほとんど関心を持たなかつたかのような印象がある。だが、『時代と私』では西田の名がしばしば言及され、強く意識されていたことが分かる。第二章「合間」は、まず冒頭で西田の有名な定年退職の辞が引用され、その「学校教師」としての人生との対比で自身の経歴が語られ始める。選科出身者として教師生活に入つた西田が不遇と不満をかこつ時期にあつたことを私たちは知っている。だが、田中は「西田幾多郎は学生から一転して教師になつたわけなのであらうか。しかし、わたしは大学を出てから、すぐに教師になることができないで、

二年ばかり浪人をしたから、そこに断絶があることになる」と述べ、「わたしは学生から教師になるのに、「黒板に向つて一回転」することが、うまくするりとはいかなかつたのである」と再度西田と自身を比較する（田中（一九七二）二四〇―二五頁）。だが、田中は東京での非常勤講師時代を格別不遇とは思つておらず、自伝の最初を飾る旧師との対比からは必ずしも否定や反発は感じられない。

早熟な十代後半の思想遍歴においても、西田の『善の研究』や他の論文集がしばしば登場する。田中の西田との関係は、中学生の頃に入入りしていた東大「新人会」で出会つた書物に始まる。「新人会の人たちがつてゐる書物でわたしに印象的だつたのは、西田幾多郎の『善の研究』である。これは名前は知つてゐても、実物は見たことがないといふ幻の書の一つであつたから、濃い紺色の表紙をもつたこの書物を見たときには、はつとしたわけである」〔1〕。一九一一年に出版された『善の研究』はすでに有名であつたが、田中がその本自体を手に入れるのは大正十（一九二一）年のことである。その頃の読書日記には、『自覚に於ける直観と反省』や『思索と体験』などを次々に読む様子が記されている〔2〕。当時の流行りであつたにせよ、京都大学に入る前にすでに西田に憧れと反発の強い意識を持つていたことが分かる。当時の日記を引用しての感想である。

後者（十月二十七日の日記）では、「善の研究」の流行に対して反撥を感じるため、「西田氏自身にも或る反撥する感情をもつ」が、しかし「氏の書いた論文を読むことがあると、大概、氏を有力な思想家と認めずにはゐられない。やはり氏は偉大なのだらう。この善の研究の第一篇も甚だ興味深く読んだ」などと、後から考へると、全くはづかしくなるやうな生意気千万の感想を記してゐる。哲学青年の一人として、わたしも西田幾多郎に関心を持たずにはゐられなかつたのだらう。（田中（一九七二）一四四頁）

この刺激に満ちた哲学読書体験は、反抗心に満ち溢れたシニカルな若者から大きな賛辞を引き出した。田中は桑木巖翼の紹介で東京大学に選科生として入るといふ道を断念すると、哲学をするために京都大学を選ぶ。その際、当時もつとも有名であつた西田のことが念頭になかつたとは考えられない。その意図はこう説明される。

わたしもドイツ哲学を勉強し、西田哲学にも関心をもつてゐた。だから、そこまではわたしは他の人たちと同じだつたと言へる。しかしわたしが京都大学の哲学科を選んだのは、西田哲学のためでもなければ、他の流行の哲学のためでもなかつた。わたしは「哲学研究」に出てゐる哲学科の講義題目を見て、波多野精一教授がギリシア原文で、プラトンやプロティノスの演習をしてゐるのを知り、このやうな勉強ができるのは京大以外にないと考へたからだ。(田中(一九七二)一六〇～一六一頁)

西田と距離をおこうとするこの文章は、嘘ではないにしても後年の強い意味づけが感じられる。田中のギリシア語やギリシア哲学への関心は東京にいた頃からあつたが、読書記録ではむしろカントやコーヘンやベルクソンらが中心で、京大入学前にプラトンの名は見られない。ギリシア哲学と共に西田哲学を生で学ぶという当時の哲学青年の誰もが抱く期待も手伝つていたことは田中自身が認めている。田中が見た『哲学研究』の講義題目とは、大正九(一九二〇)年十月一日発行の第五十五号にある「京都帝国大学文学部哲学科大正九年講義題目正科目」であろう<sup>(14)</sup>。波多野精一は田中の師となるが、そこから受けた影響などは多く語られていない<sup>(15)</sup>。ギリシア語の講読は、主に若い講師で影響力の強かつた菊池慧一郎に習つている<sup>(16)</sup>。



京都大学では西田の講義や演習に出ているが、人気は高かったものの内容と方法にあまり感心しなかつた様子が振り返えられる(17)。だが、他の教員に比して西田への関心が圧倒的に高かつた様子は、『時代と私』から窺われる。実際その自伝が引用する日記でも、先輩で東京で世話になつた三木清とならんで、西田への言及が突出して多い。「三木、西田哲学といふやうなものに、わたしはむしろ批判的だつたけれども、間接的には影響されるところもあつたかも知れない」(18)という後年の率直な告白は、おそらく正確な自己認識であろう。

田中は講義以外でも学生として西田と交わる機会があつた。あるやりとりで受けた印象が、二人の人間関係を物語るように感じられる。

西田幾多郎にぶつかつたときの、相手の自我の強さといふやうなもの、それは一種の頑固さであるが、そのぶつかるのと跳ね返つて来る人間的な感触が、今もわたしの人間西田幾多郎の印象の核心にあるやうに思ふ。若いわたしはそれに反撥し、負けずぎらひの反抗心をもやしたとも考へられるが、先生もわたしのさういふものを感じて、また自己修正をしたので、わたしも納得したといふところであらうか。(田中(一九七二)一八四〜一八五頁)

### 三、戦後の田中による西田批判——『ロゴスとイデア』「あとがき」

終戦の直前に西田が死去したのち、田中は一九四七年七月十日に京都帝国大学文学部助教授に招聘され(四十五歳)、一九五〇年二月十五日に京都大学文学部教授となる。高坂正顕、高山岩男、西谷啓治らを追放した京都大学文学部で、残つた山内得立が自らの哲学哲学史第五講座(古代中世哲学史)を譲つて田中を迎え、高田三郎(第六講座、中世哲

学史)、野田又夫(第四講座、近世現代哲学史)と合わせた三名を助教授に招いて哲学科を再建する人事を起こしたからである<sup>(19)</sup>。かつて東京で東京商科大学(一橋)の私講師職を田中に紹介したのも、当時そこで教えていた山内得立であった<sup>(20)</sup>。菊池門下として東京で「武蔵式のあばれ方」をして睨まれていた田中が、ギリシア哲学の業績が評価されていたとはいえ、京都大学に招かれることは驚きの人事だったようだ。一学年後輩の鹿野治助はこう評する。「戦後田中さんは京大に招かれた。これは天下の名人だった。当然すぎる当然なのだけれども、とにかく名人であつた」<sup>(21)</sup>。この新体制が戦後の京都大学の哲学研究を方向づけたことは先に触れた通りである。日本の哲学界にとつても研究と教育を一変させる転換であり、「京都学派の終焉」と呼ばれる。

戦前の体制を終焉させた田中は、実際西田らの哲学の仕方に極めて批判的であつた。その証拠として提示されるのは、一九四七年一月五日付で執筆された『ロゴスとイデア』の「あとがき」である。戦争末期に空襲のため受けた重傷から復帰した田中は、戦後矢継ぎ早に本や論文を公刊していく<sup>(22)</sup>。一九四七年九月、京都帝国大学文学部助教就任の直後に、戦前から戦中に『思想』で掲載した論文を収めた『ロゴスとイデア』を岩波書店から刊行し、十一月に毎日出版文化賞を受ける。西田が逝去した一年半の後、敗戦の大きな溝を越えて出版した自著に、長い「あとがき」を綴る。

そこで田中は、自身の論文スタイルについてこう語っている。

また論文の体裁も、講義口調のいはゆる學術論文——そのあるものはしかし通俗思想を特殊語に翻訳しただけのもの——や、雑然たる読書の刺戟によつて生じた感想や思ひつきを綴つた、いはゆる悪戦苦闘のドキュメント——実は一種の読書ノオトに過ぎないもの——などとは全く異なり、自分だけの問題を読者にも理解してもらふた

めに、プラトンの先例にならつて、問題そのものの出来るだけ分りやすい取扱ひ方を、いろいろと工夫しなければならなかつた。論文はいづれも、對話者の登場しない對話篇なのである。(田中(一九四七)三四一―三四二頁、傍線は評者)

ここで言及される「論文」は必ずしも西田のみを指す訳ではなく、亜流の学者たちが意識されていた可能性が高いが、少なくとも下線部は西田当人への言及である。この表現は彼の哲学態度の有名な表現であり、西田が自身で書いていた言葉であつた。

この書は余の思索における悪戦苦闘のドッキュメントである。(『自覚に於ける直観と反省』「序」一九一七年六月)  
しかし回顧すれば、この書は三十年前、数年間にわたる私の悪戦苦闘のドッキュメントである。(同「改版の序」  
一九四一年二月)

西田哲学ファンにとつては、この「悪戦苦闘」こそが醍醐味であり、その「ドッキュメント」は哲学として最高の価値を持つ。田中の揶揄は痛烈である。

田中は同じ「あとがき」で、歴史をめぐる戦前の哲学も痛烈に批判している。やや長くなるが、重要な一節なので引用したい。

歴史からいかに学び、古人を今にどう生かすかといふことは、実際の理解と探求が解くべき問題であつて、概括

的な歴史論などによつて簡単に片づくものではあるまいと思はれる。由来わが国には卑俗な歴史主義が流行してゐて、本来の歴史研究とは全く別に、単なる教科書的知識にもとづいて、簡単に世界史を概観し、そこから当来の哲学などを思惑して、競つて時代の尖端に立たうとするの風が見受けられる。世界無比とか、前人未踏とかいふことが、いはゆる獨創性の世俗的な解釈にもとづいて、何かそれ自体で絶対の価値があるやうに考へられるため、功名心に富む才人たちは、なるべく早く歴史を卒業して、何か新機軸を出さうと苦心することになる。そのためには、自分の立場を新しく見せるやうに、過去の歴史を都合よく概観することにもなるのである。しかしそのやうな歴史観は虚妄であり、これにもとづく世界大勢論の如きは、事大主義の思想的奴隷を驚かす鬼の面に過ぎない。自己獨特の思想などを誇るのは、浅薄な虚栄心に過ぎず、前人未踏の新奇をもとめる功名心は、哲学の動機としては、甚だ俗悪であると言はなければならない。哲学者の関心すべき第一義は、ただ眞実を明らかにし、善をもとめることにあるのみ。オリヂナルといふことは、思想のもの珍しさにあるのではなくて、自己自身の胸底から溢れ出て来たことを言ふだけである。(田中(一九四七)三四〇頁)

ここには二つの種類の批判がある。一つは「世界史の哲学」を論じ、ある意味で戦前の国家体制に寄り添つた「京都学派」への批判である。彼らが欠いていた「歴史研究」こそ、古代ギリシアを原典から読み解く田中自身の哲学態度であり、例えば、京都学派の華々しい哲学論文の向こうを張つて発表されていた『ロゴスとイデア』所収の諸論文であつた。堅実で学問的で徹底した歴史研究こそ「京都学派」に欠けていた態度とされる。

もう一つの批判は「オリヂナリティ(獨創性)」の追求とその標榜に向けられる。この強烈な反発も、基本的に西田哲学を念頭に置いたものであろう(23)。日本独自の思想という触れ込みは、「古人プラトンの亜流」に過ぎないと宣

言する田中にとつて、囁うべき自己の無知に他ならなかつた。その見方の延長上で、戦前の日本がギリシア哲学に關つた事実を一切否定するように受け取られる宣言がなされる。

しかしわが国には未だかつて、プラトンやアリストテレスの哲学が伝統となつたことはないのである。(田中  
(一九四七) 三四〇～三四一頁)

これは歴史記述として誤っている。私がこれまで検証してきたように、日本では明治初期よりプラトンやアリストテレスが注目され、専門研究としてまだ十分とは言えないまでも、戦後の興隆を準備する下地はあつた。また、西田や田辺や和辻らの哲学思索において、プラトンらギリシア哲学は十分に大きな役割を果たしており、それは日本哲学の糧として血肉となつていた。その事実を決然と全否定するこの文章は、戦前の蓄積と記憶が刻み込まれていた当時に、しかも当該研究の第一人者と認められていた田中が述べている限りで理解されるのであり、現代の私たちが額面通りに受け取つてはならない。つまりこれは、田中がギリシア哲学研究を、あたかも白紙からのように自身で一新させ立ち上げるといふ宣言文なのである。

この「あとがき」には、本の出版に十ヶ月ほど先立つ一九四七年一月五日の日付がついている。田中が山内得立に請われて母校、京都大学哲学科に乗り込む年の始まりである。東京で講師をしていた田中に新たに委ねられた母校の重責と、新たな時代への期待を思う時、戦前の「京都学派」的な哲学を一新させなければならないという抱負、気負いが過剰に込められていたとして不思議ではない<sup>24</sup>。そこで對抗すべき相手は、未だに大きな影響力を持っていた西田哲学とその門下であつた。田中のギリシア哲学研究の方向づけは、この事情抜きに理解されるべきではない。

田中は自身が遂行している文献学・歴史学研究と哲学との関係について、こう述べている。

著者の本来の好みから言へば、自由に勝手なことを考へるのが、何よりの楽しみなのであるが、そのやうな好みに溺れることは、何か危険なことと、許すべからざることと考へなければならなかつた。(田中(一九四七)三三六頁)

田中にとって哲学の問題は「一貫してただ「善と真実在とについて」なのである」と述べ、空襲で瀕死の重傷を負う前に書いた論文の集成を「途中」とし、「前途はなほ遠遠」と言つてこう語る。

既にプラトンは、「善」について書くことを戒めてゐるのである。しかしすべての思考と行為が、自然にそれを指すのはいかんともなし難く、私はそれについて考へざるを得ないのである。(田中(一九四七)三三八頁)

プラトンの「書き物」への警告を下敷きに、田中は自身が哲学課題へ挑む道を明示的に語る。田中が若き日に読んだ西田の処女作『善の研究』が意識されているかもしれない。田中の次著は、『善と必然との間に』と題される。

#### 四、西田と田中の共闘——『思想』上の競演

戦後に京都大学から西田哲学ら「京都学派」の学風を追放した田中は、西田哲学を否定した張本人のように誤解されることがある。だが、事実はそれと正反対に、西田は田中を評価してその研究人生のスタートを開いた恩師であり、

田中にとって最も苦しい戦時中に共に哲学を遂行した先輩の戦友であった。

田中の卒業論文は主任教授であった西田の勧めで、書き直しの上、京都大学の『哲学研究』（一九二六年十月）に出版された<sup>(25)</sup>。それが処女作「プラトンの『パルメニデス』一三一E—一三二Bについて——いわゆる「第三の人間」とプラトンのイデア論——」である<sup>(26)</sup>。この論文は、戦後にグレゴリー・ヴラストスが論文『パルメニデス』における第三人間論（一九五四年）を発表して世界で火をつけた分析哲学的な解釈とは異なるものの、プラトン哲学にとつて最も重要な問題箇所をできるだけ正確に解釈しようとする優れた論考であり、今日でも読むに値する。

田中はその折の西田の援助を意外に思っているが、それは、心情的反発から西田哲学から距離をおこうとしていた田中の研究を偏見なく評価してくれた西田の率直さへの驚嘆であつたらう。西田はそういう人であり、田中は西田のそういった人となりを了解したのである。京都大学の機関誌『哲学研究』では毎年の卒業論文の優秀作が掲載されることになつていたが、田中と同年に卒業した下村寅太郎に掲載の話は来なかつた。

二人の関係は、田中が本格的にギリシア哲学で論を發する戦争直前から戦中、つまり西田最晩年に再び重なる。田中の名著『ロゴスとイデア』は昭和十三（一九三八）年十月に發表された「ロゴス」から昭和十八（一九四三）年十二月に完結する「イデア」まで、五年にわたつて『思想』誌上に發表された八本を合わせた論文集である。田中がプラトンを中心としたギリシア哲学の立場から、より広い視野で哲学を論じていたこの時期に、西田もまた同じ『思想』で論考を發表しつづける。両者は時に同じ号で競作となり、戦時下『思想』上で共に哲学に賭けていく。

〈『思想』誌上での競作〉（点線は両者が競作した号）

一九四一年五月二八号・西田「歴史的形作用としての藝術的創作（上）」一—三五頁、田中「否定的眞實（上）」五七

〽七九頁(掲載論文七本の内)

同六月二二九号…西田「歴史的形成作用としての藝術的創作(下)」一〽三八頁、田中「否定的眞實(下)」七二〽九〇頁(全五本内)

十月二三三号…田中「時間」一〽二二頁(全四本内)

一九四二年十一月二四六号…田中「現實——主として *rupov rubos* の意味に於ける」一〽二五頁(全五本内)

一九四三年二月二四九号…西田「知識の客観性について——新なる知識論の地盤(二)」一〽五〇頁(全二本内)

四月二五一号…田中「未來」一〽二三頁(全五本内)

五月二五二号…西田「自覺について(前論文の基礎附け)」一〽二五頁、田中「オノマ」四〇〽六四頁(全三本内、あと一本は三木清)

六月二五三号…西田「自覺について(前論文の基礎附け)」一〽三三頁(全三本内)

九月二五六号…田中「過去——記憶と歴史について」一八〽四二頁、西田「傳統」六二〽六四頁(全五本内)

十月二五七号…田中「イデア」一四〽三九頁(全四本内)

十一月二五八号…田中「イデア(中)」二二〽二七頁(全三本内)

十二月二五九号…田中「イデア(下)」一〽二四頁(全二本内)

一九四四年一月二六〇号…西田「物理の世界」一〽三九頁(全二本内)

二月二六一号…西田「木村榮君の思出」三六〽三八頁(全三本内)

三月二六二号…西田「論理と數理」一〽三六頁(全二本内)

五〽六月二六四号…西田「豫定調和を手引として宗教哲學へ」一〽二三頁(全三本内)



七月二六五号…西田「デカルト哲學について」一〇一頁、「同附録」二一〇頁（全二本内）  
八〇九月二六六号…田中「技術」一〇二九頁（全二本内）

十月二六七号…西田「生命」一〇一七頁、田中「技術」一八〇三頁（二本のみ）〔戦時中最後の号〕

一九四五年八月二六八号…西田「生命（承前）」二〇四三頁（西田の遺稿となる）（全二本内）

一九四六年一〇二月二七二号…田中「最も必要なものだけの國家」一〇五二頁（全二本内）

戦時中に『思想』上でくり広げられた競演は一般にも注目されており、後年に田中は上山春平との対談で、横光利一が田中に軍配をあげたというエピソードを嬉しげに紹介している<sup>(27)</sup>。

上山「戦争中の、紙の統制で薄つぺらになった『思想』に、西田先生の論文と田中先生のもの、二つだけというものが何度かありましたですね。あれは非常に印象的でした。」

田中「あれは、みながよく覚えていてくれましたね。ぼくも張り合いがありました。あのころ純粹の哲学論文を書くところがほかには一つもないのですよ。そこで西田先生ががんばってくださいるから、ぼくもやろうと思いましてね。」〔中略〕

田中「ぼくはあれは一生懸命になつて書いたな。つまり、あしたは生きるか死ぬかわからないわけだからね。どういうことになるかわからんときだから、それは本気になつて書いた。本気になつた論文は、ぼくと西田先生しかなかったんだから。」〔中略〕

田中「ほんとに純一にやられたから偉いですね。〔中略〕それがやれたのは、やはり西田さんの一種の精神的な

強さでしようね。ぼくも自分で仕事をしていて、純粹に展開していく思想の喜びのなかで、これだけあれば死んでもよいと思っていた。だから、西田先生がそういう仕事をしてくださっているのは、非常に励みになったし、同時に負けるものかと思つてやつたものですよ。」（『対談』七〇―八頁）

岩波書店の『思想』は、戦争末期に「無編集の編集」と呼ばれる状態にあつた。『思想』の歴史（一九二二年―一九四五年）を振り返る座談会で、米谷匡史はこう整理する。田中が「現実」（一九四二年十一月）論文を出す頃から、『思想』は、紋切り型と化した世界史言説によつて時局に参入しようとするスタンスを軌道修正し、そのようなメディアのあり方から撤退していきます。（『中略』）田中美知太郎や西田や和辻がそれぞれに論文を寄稿し、雑誌としては時局と距離をとりながら淡々と無編集でやつていく、消極的な抵抗やレジスタンスをあらわしていると言われるような時期になつていきます<sup>28)</sup>。田中が発表した一連の論考は、ギリシア文化や哲学を学問的に論じるという体裁を取りながら、その中に厳しい社会・体制批判が込められた<sup>29)</sup>。それは「消極的な抵抗やレジスタンス」と呼ぶ以上のものであつた。西田に同様の意図があつたとは思われないが<sup>30)</sup>、戦時下で淡々と哲学を追求する二人の姿勢は、それ自体一つのメッセージとなつていた。

田中が敬意を込めて振り返るように、西田はもつとも厳しい時期に哲学をやり抜いた戦友であつた。

## 五、田中の西田ギリシア哲学評価——上山春平との対談から

西田が西洋近現代哲学を基盤としながらもギリシア哲学にも強い関心を持ち、しばしばプラトン、アリストテレス、

プロティノスらを援用していることは広く知られている。では、西田のギリシア哲学理解はどのようなものであったのか、西田哲学にとってギリシア哲学者はどのような意味を持っていたのか。この問いに十全に答えるためには、より広い考察が必要である。だが、田中による戦後の西田批判の要点の一つが歴史・哲学史の理解に向けられていた以上、この点を避けては通れない。

田中が西田のギリシア哲学理解に直接論及することはほとんどなかったが、上山春平との対談ではいくつかの点でコメントしている。関連する資料と共に整理してみる。

#### 〔A〕古典教養への素養

西田のヨーロッパ教養は明治人に共通のものであり、彼独特というわけではない。彼らは広いパースペクティヴと古典への崇敬を持ち、直接に欧語文献を読む世代であった。そこにはシナ哲学、漢学の素養も含まれる。西田はエピクテトスやアウグスティヌスをしきりに読み、「かなり広いスケールでもってヨーロッパの古典を直接読むということにわりあい興味を持っていた」。つまり、「明治人がヨーロッパ文化を広いパースペクティヴ（遠近法）で見ているわけで、そういう教養がある」という（「対談」二頁）。

#### 〔B〕旺盛な吸収力

西田は貪欲に勉強して新しいものを吸収し、ギリシア哲学、とりわけアリストテレスをヒントとして積極的に取り入れていた。田中の大学時代、ギリシアに対する興味が高くなり、それをやる人がだんだん出てきたが、「そういう若い人たちの機運に対して、かえって西田さんのほうが敏感に反応した」（「対談」二頁）と振り返る。西田の古典学への関心（「古学派的态度」と呼ばれる）は田中らの古典学を奨励し、その研究の「推進力」になっていったという（「対談」六頁）。西田は京都大学でプラトン『パルメニデス』、アリストテレス『形而上学』を講義したが（一九二四、二六

年)、後者ではイエーガー『アリストテレス形而上学の成立史研究』(一九二二年)等の紹介していた。こういったギリシア哲学への関心は近代以降の哲学に関心のある学生の側では受け入れにくかった模様で、「このアリストテレスへの転向は、一般の聴講者にはむしろショックだったらしい」(田中(一九七二)一八二頁)と回想される。人々がドイツ観念論から現象学に関心を集中させる中、エリウゲナやアリストテレスに戻ろうとした西田の見識を、不満を感じた弟子たちとの対比で、「ドイツ哲学がほとんど唯一の哲学と考へられてきたこの時代の限られた限界のなかで、西田幾多郎が一人これを超えてものを見ることができたわけで、かがドイツ哲学の新傾向を紹介した最初の人であるだけに、やはりかれの見識の高さを示すものとも言はれるだらう」(田中(一九七二)一八三頁)と評価する。これが次の対話にもあるギリシア古典への開かれた態度である。

上山「西洋の学問をやるときもその源泉に帰るべしという古学派的態度を、西田さんは、はつきりもっていて、それが西田さんの思想の展開において重要な意味をもっているだけでなく、思想史的にも意味をもっているのではないのでしょうか。」

田中「それは、西田さんはわれわれ学生に対してそういうことを言ったね。ツギジデスは実に偉い歴史家だとか、プラトン、アリストテレスはたいへんなものだ、とかいうようなことを言うわけだ。直弟子には、それがぴんとこない。〔中略〕そういうところは、西田さんのほうが、限界がはるかに広いですよ。」(「対談」六頁)

〔C〕正確な理解、深い理解はない

他方で、西田にギリシア哲学への本格的で学問的な理解が欠如していたことを、田中は指摘する。西田自身も、古

古典語を学ばなかったことを晩年に振り返っている。東京大学選科生の頃ケーベルと面会した際、「お前はなぜ古典語を学ばないのか」と尋ねられ、日本人として古典語を学ぶ困難を述べると、同級の岩元禎がギリシア語を読むことに触れ、「You must read Latin at least」と言われたという<sup>(31)</sup>。西田本人もこの重要な語学力の欠如が大きな意味を持つことは自覚しており、後年にもギリシア語を学ぼうと努力している。一九三八年十一月に綴られた「ギリシア語」という小文で晩年の語学学習について語っているが<sup>(32)</sup>、家族の証言でも、定年後にラテン語やギリシア語の本格的な勉強を始め、「よく孫の横で単語の暗記をしたり、鎌倉の波打際でギリシア文字を書いてゐた話を聞いた」とある<sup>(33)</sup>。他方で、西田がギリシア語を学ぼうとしたのは決してプラトンやアリストテレスら哲学書を読むためではなく、ホメロスやトゥキュディデスら文学と歴史書への憧憬であった。「A」で触れた明治的古典教養の色彩が強かったのかもしれない。

田中「西田先生はヨーロッパのほんとうの哲学的トラディション（伝統）をちゃんと頭に入れていた。西田先生にはやはり明治時代からの教養があつて、広いパースペクティヴで哲学のトラディションをとらえた強みがあつた。その意味ではヨーロッパの伝統をうけている。〔中略〕西田先生は、そういう意味でヨーロッパの文明を大所から見てやつていたということが言えますね。だけど、ヨーロッパの哲学をほんとうに自分のなかに入れてやっているかというところ、これはちよつとあやしい。」（「対談」一一頁）

田中「普遍をそんなふうを考えるのは、ぼくに言わせればナンセンスだね。そういう点では西田さんはプラトンのアリストテレスから面白いヒントを得られたけれど、西洋の考え方にうまく結びついていくかどうかからない。」（「対談」一二頁、傍線は評者）

〔D〕東西の融合、あるいは東洋の独自性という評価に否定的

西田の代名詞となった日本独自の哲学とか、東洋思想の融合といった側面に対して、田中は厳しい。そのような誉め方は日本のインテリートのコンプレックスの裏返しだという（「対談」九頁）。他方で、その限界内での西田の意義は認められていた。

わが国の哲学界には鑑賞家や演奏家はあっても、われわれの鑑賞に堪へる作曲家はまだ出てゐなかつたわけで、西田幾多郎がやうやくその仕事をはじめたといふところであらう。これを「世界無比の独創的」といふやうな形容詞でかつぎ上げることは、むしろ滑稽なことであらう。われわれは世界の哲学に参与し、その歴史に正規の登場をするためには、むしろ普遍性をもつた哲学を生まなければならない。西田の仕事はさういふ見地で新しく評価され、また批判されなければならないやうに思ふ。（田中（一九七二）一八六頁）<sup>(34)</sup>

また、西田哲学が強調する「無」についても、プラトン哲学でもキリスト教の創造論でも論じられており、東洋的と言つて簡単に片付けるわけにはいかないと指摘している（「対談」一二頁）。

〔E〕「場所」と「コーラー」

以上の論点を踏まえて、西田のギリシア哲学との関係で最も重要な例となる「場所」概念について、田中のコメントを検討しよう。その概念を最初に提示した論文「場所」（一九二六年）で西田は、そのアイデアがプラトンに由来することを明言する。

此の如きイデヤを受取るものともいうべきものを、プラトンのテイマイオスの語に倣うて場所と名づけて置く。無論プラトンの空間とか、受取る場所とかいうものと、私の場所と名づけるものと同じいと考えるのではない。(西田(一九八七)六八頁)

これは同じギリシアのアリストテレス由来の論理的思考「主語となつて述語とならない実体」に対抗し「述語となつて主語とならない」という論理的な意識定義を求めたものであつた。西田の思索にとつて新たな決定的な一歩となつた「場所」概念の開發は、ギリシア哲学を介しての進展であつた<sup>(35)</sup>。

これに対して、田中はこう批判している。

田中「ヒポケーメノンというのは二つの意味があつて、〔中略〕「主語となつて述語とならない」というのは重要な規定だけれど、それだけ取つては不十分です。「場所」についてもプラトンのコーラーというのは西田先生の「いうような意味じゃない。」〔対談〕一頁)

この批判はギリシア哲学理解としては正當かもしれないが、西田とギリシア哲学との接点、いや對話を遠ざけるものになつてゐる。もし西田の「場所」という考えがまったく独自の日本的なものなら、わざわざ「プラトンのテイマイオスの語に倣うて」と述べる必要はない。問題は、「於てある」という「場所」概念がプラトンとの関係で発想されたという点にある。私は、西田のギリシア哲学理解が正しいかどうかではなく、彼が直観的にヒントを得た哲学的視

点が何であつたのかが大切と考える。そこから、現在の哲学、あるいは西田哲学におけるギリシア哲学の意義が再考されるはずである。西田がヒントとして利用した側面と限界を見た側面の交錯、さらには田中がその先にあると指摘するプラトン哲学の根源が重要となる。

田中の正面からの批判とは対照的に、山内得立は西田没後の一九四六年四月、『哲学研究』に論文「場所とコーラ」を発表し、西田「場所」論のギリシア哲学的背景、具体的にはプラトン『ティマイオス』、アリストテレス場所論との関係を真剣に吟味する。

西田哲学の「場所」はプラトンの「ティマイオス」篇のコーラの思想に端を発してゐることは周知のことであるが、我々はそれらが互に如何に近く、また如何に原理的に異なるかを明かにすることによつてこの哲学の理解に資するとともに先生の人格を偲びたく思ふ。(山内(一九四六)四九頁)

山内はプラトンの「コーラ」やアリストテレスの「マテリア」分析との対比で、西田の「場所」が「存在の根拠また理由を明かにしたものである」(七二頁)と結論づけている。

西田が「ギリシャ哲学を介して」自身の思索を一転させたと回顧したのは、近代哲学(とりわけ、主観が認識的所与を構成するとする新カント学派の認識論)を乗り越える総合的な視座を得たという意味であろう。西田はプラトンのコーラ概念については、「質料的原理に過ぎない」として、その可能性追求が不十分であることを指摘する。にもかかわらずこの用語を用いたのは、そこに直感的に何か決定的に重要なものを感じたからであろう。「コーラ」の哲学的可能性への着目は一流のセンスであり、世紀の終盤にはジャック・デリダが『コーラ』でこの特異な概念に再着



目することになる<sup>(36)</sup>。プラトンが提示した「コーラ」は、西洋哲学の思考の基盤となったアリストテレスの「個体Ⅱ第一実体」、つまり安定した主語・基体存在とは異なる原理であり、古代・近代の二元論を越える潜在性を秘める。西田がそこにより根源的な可能性を窺った点こそ慧眼である。

竹田篤司は『物語「京都学派」』で、西田に対するギリシア哲学研究からの批判をこう評している。

古典に通じない「浅薄」のゆえに西田を責めるのではなく、それにもかかわらず、西田の成し遂げた力業こそが評価されなければならないだろう。しかしそれは同時に、近代日本哲学史における二代目と三代目との必然的な、しかし、同時に劇的な、ジェネレーション・ギャップでもあったのである。(竹田(二〇〇二)二〇七頁)

竹田は西田とケーベルの関係に注目しつつ、「しかし西田は、自己自身の思索の深化のために、あえて「古典語」の究明を、ひいては、「古典」の厳正な読みにもとづく省察を捨てたのである。そのツケを、西田は没後間もなく払わなくてはならなくなる。お膝元だった京大において、山内得立や田中美知太郎らの猛反撃が始まるからである」(三二六頁)とまとめている。

## 六、結び——協働に向けて

京都大学哲学科で教鞭をとり始めた田中は、哲学を自由に論じることをギリシア哲学研究の現場から締め出し、演習では正確な翻訳だけを課していた<sup>(37)</sup>。田中は、ギリシア哲学者の文章を一字一句ゆるがせにせず、読解することが、

またそれだけが大学で行う学問であり、その内容についてあれこれ思索したり議論したりすることは、個人的に自宅で行うか、お酒の席で交わす余儀として扱っていた。西田的な「哲学」、「Selbstdenken」と正反対の態度である。だが、この断固たる姿勢は、哲学を排除したりその意義を一切認めないといった無理解ではなかったと思われる。むしろ、自身の役割と戦後の哲学の現状を深く自省した上での禁欲的態度であつたろう。この点では、田中の薰陶を受けた松永雄二が、回顧談で若き日の様子をこう述べている。

ただ、日本つて東洋哲学の空気だつたんですよ。「中略」そういう東洋哲学風のやつを、どういう形でつぶしていったかというと、田中美知太郎とかがギリシア語やラテン語をちゃんと読む。だから、あんまり変なことを言わない。それで何なのかと思うことはありましたね。でも、田中美知太郎は非常にいい先生で、「私たちの時代はセンスがないんだ」つて言うんですよ。「センスのある次の世代で何かやってくれ」と、よく言っていました。（松永雄二「インタビュー：哲学の難しさ・面白さ」西日本哲学会編『哲学の挑戦』（春風社、二〇一二年）四四八頁）

あるいは、田中にとつて西田が「センスのある世代」であり、真似しようとしてもできない先輩だったのかもしれない。あるいは、明らかにプラトンが哲学センスの代表であり、西田ですらそれを真似できない世代だったのかもしれない。大事なことは、田中が自身の禁欲的なギリシア哲学研究を、後の世代が本場の哲学を始める準備段階であると明確に自覚していたことである。松永自身は、「田中美知太郎とかそういうところではじまったものを、われわれの世代で何とかしようと思っていました」（同四四九頁）と語っているが、私が見る限りでは、田中のこの「次世代」への期待は、人々に必ずしも共有されてはいなかったようである。田中の西田批判は、京都大学という哲学の中心地でギリシア哲

学にどのように向き合うかをめぐる対立であったと言つてもよい。それが日本の哲学そのものにとつて、どのような意味を持ったかが重要である。

西田幾多郎と田中美知太郎、二人の間に横たわっていたものは何か。いや、両者に溝は存在せず、時代と世代の差がもたらした責任でのみ相反するのか。二人のギリシア哲学との関わり方に違いはないのか。プラトンとどう向き合い、そこで自分自身がどう哲学をしていくか。古来試されてきたその課題に、二人は正面から、異なつた仕方であつた。西田の死後、京都大学への赴任を前に綴つた『ロゴスとイデア』「あとがき」で田中は、「わが国流行の他の哲学書の如きものを期待されることのないやうに」と希望を表明しつつ、日本の哲学へ痛切な批判を投げかける。

人々が時代の尖端に立たうとしたり、近代精神の基礎を築いた人たちの真似をしようと思つても、それが滑稽な猿真似に終らなければならぬ空しさは、いつたい何によるのか。私たちの猛省すべき問題がそこにあるのではないか。(田中(二九四七)三四一頁)

この言葉は「私たち」に猛省を促す。その中には、西田を含む戦前の哲学者たちがいる。田中は、自身の先を行く近代哲学の超克者・西田幾多郎に向かつて、讃辞と共に否定と反省の言葉を投げかけた。それは、古代哲学者プラトンと対話することで日本哲学を乗り越え、日本で哲学を始めようとした田中美知太郎、つまり「滔々たるわが国哲学界の風潮の外に立「つ」…一個の素人」が発する「幼稚な問題」への悲痛で孤独で爽快な哲学宣言ではなかつたらうか。だが、田中がそこから現実を見ようとした「古代ギリシア」は、私たちに真実と善を見せてくれるのか。それは、後継者たる私たち自身の哲学に懸かつている。

一九四五年六月七日の後、空襲で受けた火傷で生死の境をさまよう田中は、西田の訃報に接する。

さう言へば、夢のやうな幻想のなかでも、わたしは西田さんに行き遭つたやうで、先生は何か詫び言のやうなことを言はれたみたいだつた。むろん内容は記憶にないが、弁解めいた口調の弱さをさう感じたのかも知れない。(田中(一九七二) 四〇四頁)

だが、田中自身と共に、この「夢のなかの妄想」に「特別な意味」を求めるのはよそう。大切なのは、その後田中は再生し、プラトンと共に日本で新たな哲学を始めたことである。

### 参考文献

- 加来彰俊『回想』(私家版、二〇一六年)
- 竹田篤司『物語「京都学派」』(中央公論社、二〇〇一年)
- 田中美知太郎『ロゴスとイデア』(岩波書店、一九四七年)
- 『時代と私』(文芸春秋、一九七一年)
- 田中美知太郎・上山春平(対談)『西田哲学の意味』(『日本の名著四七 西田幾多郎』(付録十五) 中央公論社、一九七〇年)
- 西田幾多郎「場所」(上田閑照編『西田幾多郎哲学論集I』岩波文庫、一九八七年(一九二六年))
- 『ギリシャ語』(西田幾多郎全集第十卷) 岩波書店、二〇〇四年(一九三八年十一月)
- 『明治二十四五年頃の東京文科大学選科』(西田幾多郎全集第十卷) 岩波書店、二〇〇四年(一九四二年十月)
- 山内得立「場所とコーラ」(『哲学研究』三四七、一九四六年四月)

## 注

(1) 本稿は、二〇一五年十二月十二日に京都大学文学部で開催された第三十回日本哲学史フォーラムで発表した「西田幾多郎とギリシア哲学——「場所」論文を中心に——」の一部を発展させたものである。フォーラムでは参加者から多くの有益な指摘や質問をいただいた。感謝申し上げたい。そこで扱った西田「場所」論のギリシア哲学との関係は、稿を改めて論じることにしたい。

(2) このテーマについては、納富信留『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会、二〇一二年）第二部参照。

(3) 熊野純彦『日本哲学小史——近代一〇〇年の二〇篇』（中公新書、二〇〇九年）、「戦時期のもうひとつのありかた——出隆と田中美知太郎の場合」一二六頁。

(4) 前掲、一三四～一三五頁。

(5) 戦後のギリシア哲学研究を代表する一人加藤信朗は『平和なる共生の世界秩序を求めて』（知泉書館、二〇一三年）で、戦後日本での政治哲学欠如を反省している。

(6) 本考察で主に用いるのは田中や関係者の証言であるが、それらが事実をそのまま示す訳ではないことには注意が必要

である。後年の回想には誤りや記憶修正がつきものであり、文書が書かれた相手や状況も重要となる。資料の欠如、沈黙も重要な意味を持つことがあるが、本稿はこれまで検討した範囲のみを提示する。注(11)も参照。

(7) 高等学校卒業生にのみ「本科生」としての大学入学資格が与えられたため、四高中退の西田も、東京開成中学校卒業の後に上智大学を経た田中も「選科生」とならざるを得なかった。

(8) 『西田幾多郎全集 第十巻』（岩波書店、二〇〇四年）四〇九頁。

(9) 田中が東京大学でなく京都大学、その選科で学んだ事情は、「直接自分の学びたいと思ふものだけを学ぶといふコースを選んだ」と説明されている（田中（二九七）一一七頁）。選科から本科への試験もあったがそれも受けず、「選科生の特権を利用して、多くの必修科目さへも取らずにすましてしまった」という具合であった（同一二二頁）。自伝からは、変則的な学籍にこだわらない態度が見られ、京都大学では確かに選科出身者が活躍する余地が大きかったが（林達夫、木村素衛、長澤信壽ら）、実際には京都大学でも東京大学と似た選科への差別があった。その事情は、竹田（二〇〇一）

三〇～三六頁が詳しい。

(10) 昭和二(一九二七)年一月十五日(土)の日記に「波多野君より田中(美)の手紙につき意見あり」とある(『西田幾多郎全集第十八巻』(岩波書店、二〇〇五年)一三六頁)。翌日の午前に西田は波多野を訪ね、翌日から月末にかけて菊池慧一郎の「九州大学」の件で新村出と度々会い、菊池本人とも面会していることから、あるいは人事がらみの用件だったのかもしれない。卒業後の田中は東京に戻って無職であった。

(11) 『時代と私』は系統だった自伝ではなく、中学時代から終戦までを範囲とする。だが、「回想」の持つ限界と歪みに著者は敏感であり(三四頁、一八八頁)、先輩の三木清の証言について繊細で批判的な資料分析を加えている。他方、次節で検討する『ロゴスとイデア』の「あとがき」は、西田の名前は出さないものの、強い批判が込められた戦後早い時期の文章である。

(12) 田中(一九七二)八八頁。これは開成中学を卒業する大正九(一九二〇)年の頃の話である。

(13) 田中(一九七二)一四三～一四四頁。

(14) 宗教学の講義・波多野として「Platon, Politia (希臘原

文)」とある(二二〇頁)。そこには無論、西田の三つの授業名も載っている。なお、『哲学研究』は定期的に授業一覧を載せてはならず、おそらく偶々この号で目にしたものである。田中が当時在学していた上智大学の図書館には現在も『哲学研究』のバックナンバーがある。

(15) 波多野精一はケーベル博士の薫陶を受け、若くして『西洋哲学史要』を著した。一九一七年十二月から三七年七月まで京都大学教授として教えた。京都大学では、田中や山内の他にも、長澤信壽(田中と同年卒)、岡田正三、鹿野治助、高田三郎(共に一九二七年卒)、杉正俊(一九二九年卒)ら古代哲学を専門的に勉強する学生がいた。

(16) ケーベルの弟子であった専門家の田中秀央が海外に出たため、慶應義塾出身で鹿子木員信の弟子であった菊池が教えていた。強い個性で反発を買ったこの変わり者について、田中は決して悪く言っていない。田中(一九七二)三一、一六三～一六五頁。

(17) 田中(一九七二)一七二～一八六頁。

(18) 田中(一九七二)三五二～三五三頁。

(19) 野田は田中より一月あまり早く五月三十一日に着任している。高田の着任は十一月三十日で、三人で一番遅い。な

お、この間の事情について『京都大学七十年史』の記述がいかに不正確かは、竹田(二〇〇一)二〇二〜二〇四頁が指摘している。

(20) 『講師二十年、教授十五年』『田中美知太郎全集(増補決定版)第十三巻』(筑摩書房、一九八七年)四九七頁。山内(中川)は一九一四年に京都大学を卒業した後、東京に出て東京商科大学で教授となっていた。京都大学に戻るの是一九二九年である。

(21) 鹿野治助「武蔵の如き一面」『田中美知太郎全集第四巻』「月報」(筑摩書房、一九六九年三月)二頁。当時の在学生だった加来彰俊も、「事情を知らない当時の私たちは、この人事に驚いたが、しかし山内先生と田中先生とは戦前からいろいろと親しい関係にあつたのである。」と回想している(加来(二〇一六)一四六頁)。

(22) 『愛国心について』(生活社、一九四六年三月)、『ギリシア人の智慧』(中央公論社、一九四六年六月・一九四二年の復刊)、『言論の自由について』(生活社、一九四六年七月)、『古典的世界から』(中央公論社、一九四六年十二月)、『ヒューマニズムの歴史』(史学社、一九四七年二月)と、一年間に五冊を出している。

(23) ちなみに、田中が京大でギリシア語を学んだ菊池慧一郎は自著に『オリヂナリティー』(古今書院、一九四〇年)という表題をつけているが、それは屈折した自負を込めたものであり、田中の標的ではなからう。

(24) この一月五日という時点ですでに山内から招聘が伝えられていたかが鍵となる。下村寅太郎の引き抜き工作が不調に終わった山内が、田中にいつ打診し、田中がいつ回答したか、現時点では調べがつかない。だが、三月十日付で、岩手で疎開中の波多野精一が田中に京大移籍受諾への祝いの手紙を送っていることから(竹田(二〇〇一)二一三〜二二四頁所収)、それに先立つ数ヶ月に交渉と決断がなされたのは間違いない。「あとがき」を認めた新年に、すでに京都への招聘打診がなされていたと考えるのは合理的であろう。その場合、京大への移籍を睨んだ宣言文と受け取ることもできる。

(25) 当時は選科生も卒業論文を提出することになっていた。後にこの制度は廃止される。

(26) 『田中美知太郎全集(増補決定版)第五巻』(筑摩書房、一九八七年)所収。この経緯は、田中(一九七一)二六、一二二頁で語られている。西田は投稿を促すため、二

枚の葉書を送ったという。

(27) 「対談」八頁。

(28) 『思想』編集部編『思想』の軌跡一九二一〜二〇二一』(岩波書店、二〇二二年) 八三頁。

(29) 「イデア」の記述で検閲に引っかけられる危惧を持ちながら、あえてそれを発表した経緯は、田中(一九七二) 三六六〜三六七頁に記されている。時代批判は、とりわけ「現実」「名目」「イデア」に顕著である。

(30) 晩年の西田が紙の配給不足で出版が滞りがちな『思想』に気をもみ、自身の論考を出版することに大きな関心を払っていた様子は、田中自身の淡白な態度と対比される(田中(一九七二) 三七四〜三七五頁)。

(31) 「明治二十四五年頃の東京文科大学選科」『西田幾多郎全集第十卷』(岩波書店、二〇〇四年) 四一〇〜四一一頁。

(32) 『西田幾多郎全集第十卷』(岩波書店、二〇〇四年) 三七五〜三七七頁。

(33) 西田外彦「父」、下村寅太郎編『西田幾多郎——同時代の記録——』(岩波書店、一九七一年) 二五八頁。

(34) 「対談」九〜一〇頁にも同様の比喩がある。ただし、プラトンなど古典の演奏は違うと言う。

(35) 『善の研究』「版を新にするに当って」(一九三六年十月) 参照。

(36) ジャック・デリダ、守中高明訳『コラプラトンの場』(未来社、二〇〇四年・原著、一九九三年)。西田との関係は小林敏明『西田哲学を開く——〈永遠の今〉をめぐる』(岩波現代文庫、二〇一三年) 第三章参照。

(37) 加来(二〇一六) 一七八〜一七九頁など、弟子たちの証言から確認される。こういったギリシア語原典講読の演習は、私自身が東京大学文学部、同教養学部、東京都立大学などで経験した、哲学の議論こそが最重要という姿勢とは対極をなすが、田中後でも基本的に守られているようである。